

## 米国がロシアに「見逃せない提案」

A Panicked Empire Tries to Make Russia an "Offer It Can't Refuse"

[https://www.globalresearch.ca/panicked-empire-tries-make-russia-offer-it-cant-refuse/5806657?utm\\_campaign=magnet&utm\\_source=article\\_page&utm\\_medium=related\\_articles](https://www.globalresearch.ca/panicked-empire-tries-make-russia-offer-it-cant-refuse/5806657?utm_campaign=magnet&utm_source=article_page&utm_medium=related_articles)

By Pepe Escobar  
ブラジル生まれ。アジアタイムスの通信員。グローバル・リサーチ（本誌）の定期寄稿者。

### リード

米国は NATO とロシアの戦争が敗北に終わる可能性が高いことを認識し、撤退の提案を試験的に行っている。

王座の背後にいる者たちの権力が急速に失墜していることの表れである。

\* 軍事的には、ウクライナにおいてやがて招来する NATO の屈辱によってそうなる。

\* 財政的には、遅かれ早かれ、南半球の大半の国々が、破産した不正な巨大企業の通貨とは関わりを持ちたくないと思うようになる。

\* 政治的には、世界の多数派は、強欲で信用を失った事実上の少数派に従うのをやめようとしている。そしてそれらのために、決定的な措置を取ろうとしている。

だから今、玉座の背後にいる人々は、なんとか軍事面だけでも、迫り来る災害を食い止めようと画策している。

しかし、なぜモスクワはこんな遠回しな提案を真剣に受け止めなければならないのか。いまは軍事的前進の目前で、しかもその先に勝利の栄冠が待ち受けていると言うのに。

### 以下本文

米国高官筋の確認情報では、ウクライナに関する新しい指令が、ブリンケン米務長官に伝えられた。

プリンケン、実際の権力という点では、ストラウス派のネオコンと新自由主義者のメッセンジャーボーイに過ぎない。米国の外交政策を実際に動かしているのはもっと上の連中である。

(訳注： レオ・ストラウス。ドイツ出身のユダヤ人哲学者。シカゴ大学でかなり怪しげな哲学を教え、ネオコンの始祖となる)

国務長官は通常、新しい指令やクレムリンへのメッセージを主要な紙媒体で伝える。それはすぐにワシントン・ポストに掲載される。アメリカの主要メディアは、ニューヨーク・タイムズが国務省、ワシントン・ポストがCIAと接続し、たがいに分業している。この種の情報はきわめて重要であり、正確さが求められる。そのため帝国の首都の活字メディアが伝える必要があるのだ。

今回目新しいのは、1年前のロシアのウクライナ侵攻以来、初めてアメリカが「見逃せないオファー」形式の提案を行っていることである。具体的にはロシアの安全保障上の要求への譲歩をも含んだ提案である。

(訳注：“Offer It Can't Refuse”は文脈から見て交渉の落とし所まで示唆した**提案**を指す業界用語と思われる)

重要なのは、米国の提案がキエフ政権の意向を完全に無視していることだ。米国は以下のことを認めた。

この戦争は、米帝国とその手先であるNATOがロシアを相手に戦っている戦争であり、ゼレンスキーらは取り替え可能なたんなる代理人に過ぎない。

### 「攻撃をやめよ、お願いだ」

ワシントン・ポストのモスクワ駐在の古参記者ジョン・ヘルマーが重要なものを提供してくれた。すなわちプリンケンのオファーの全文である。

そこにはもちろん、「米国の兵器がプーチンの侵略軍を粉砕するのに役立つ」などの空想的な文言が広範囲に散りばめられている。そこには、歯切れの悪い説明も紛れ込んでいる。たとえば「言い換えれば、ロシアは休息したり、部隊を再編成したり、攻撃の準備をしたりしてはいけないということだ」などなど。

ワシントンからのメッセージは、一見すると、アメリカがクリミア、ドンバス、ザポロージエ、ケルソンに対するロシアの支配を認めるかのような印象を与える。

それは例えば、“クリミアとロシアを結ぶ陸橋”だったり、“既成事実”などという表現だ。

そして、以下のような提案が連ねられる。

ウクライナは非武装化される…。HIMARS ミサイルやレオパルド、エイブラムス戦車の配備はウクライナ西部に限定される…。そしてロシアのさらなる進撃に対する“抑止力”として維持される…。

かなり曖昧な表現だが、提示されたのは、実際にはウクライナの分割である。

ロシア参謀本部が「2023年攻勢」という未知の作戦を取りやめることが求められる。そしてそれと引き換えに、非武装地帯を含むウクライナの分割が提案されている。

この分割は、最悪の場合キエフの黒海へのアクセスを遮断するような壊滅的な分割となる可能性もある。さらにポーランド国境を越えるような NATO 製武器の供給を遮断する可能性もある。

米国はこの提案を、“**ウクライナの領土を維持し公正な平和へ進む道**”と定義している。

まあ、さほどでもないが。

この提案が実現するとどうなるだろうか。ウクライナは解体されることにはならないだろう。ポーランドが食い物にしたがっている西部の土地もキエフ政府が保持することになるだろう。

「最終的な戦後の軍事バランス」に関するワシントンとモスクワの直接取引の可能性も指摘されている。そこではウクライナの NATO 加盟の見送りも含めて話し合われる。

アメリカ人は この提案を自画自賛している。「ウクライナは EU に加盟し、強力で清潔な経済」を実現できると信じているようだ。

しかしすでに、ウクライナに残っている価値のあるものはすべて、金持ちに食い物にされてしまった。

彼らは途方もなく腐敗した寡頭勢力、またブラックロック系の投資家や投機家であった。

ハゲタカ企業の連中は、ウクライナの穀物輸出港を失いたくないし、EU との貿易取引権益を放棄するわけにはいかないのだ。

彼らはロシアの攻撃によって、黒海の主要な海港と輸送の拠点であるオデッサが占領されることを恐れている。もしそうなればウクライナは陸の孤島になってしまう。

プーチン大統領と、安全保障理事会のパトルシェフ長官やドミトリー・メドベージェフ副議長などがアメリカの権力者を信じる理由は、いまのところな

い。特にプリンケンやワシントン・ポストのようなたんなる使い走りの情報を信じる理由はなにもない。

結局のところ、Stavka（ロシア軍最高司令部）は、たとえ文書による申し出があったとしても、プリンケンらを「合意能力」を持たない者とみなしているようだ。

これは、米国側の必死の交渉である。モスクワを引き延ばし、今後数ヶ月の攻撃計画を遅らせたり中止させたりするために、ニンジンをつぶら下げようとするものである。

身内さえ誰も相手にしていない。ストラウスを先頭とするネオコンの連中ばかりでなく、古参の反体制派のワシントン職員でさえ、この国務省の作戦は何の役にも立たないと思っている。

ロシアは例によって、古典的な「戦略的曖昧さ」モードで非武装化、非ナチ化、非電化を進め、ドニエプル川の東側を境界として、いつでもどこでも適当なところで（あるいはそれよもう少し先で）進出をやめるだろう。

**結局、この“ふところ深い国”は何を望んでいるのだろう。**

NATO 対ロシアという本質的な競争がある。ワシントンの野望は、ウクライナという一地方をはるかに超えている。

私はロシアー中国ードイツを結ぶユーラシア連合という悪夢について話しているわけでもない。

ここでは戦場ウクライナでのありふれた議論にもう一度こだわってみよう。

軍事、経済、政治、外交の主要な「提言」は、昨年末の NATO **評議会の戦略文書**に詳述されている。

そして、もう一つの文書「**戦争シナリオ 1：現在のテンポで戦争が続く**」では、ストラウス派ネオコンの戦争政策が全面的に明文化されている。全てはここにある。

\* 「キエフが勝利するために必要な支援と軍事支援を行う」ことから、「ウクライナの領空支配とロシア軍への攻撃を可能にする戦闘機や、ロシア領内まで射程に置くミサイルなど、軍事支援の威力を高めること」まで。

\* ウクライナ軍が「西側兵器、電子戦などのサイバー能力を身につけ、新兵を軍務に継ぎ目なしに統合する」ための訓練から、ドンバスの最前線での実戦能力強化、「非正規戦を想定した戦闘訓練」まで。

それは「クレムリンと取引しているすべての団体に間接的制裁を課す」ことに加えて、「すべての謀略の母」(強奪)に帰結する。すなわち「ロシアが米国やEUの海外口座に保有する3000億ドルを没収し、ウクライナ復興資金に充てる」算段である。

しかしプーチン、ゲラシモフ参謀総長を頂点とする統合参謀部のハルマゲドン將軍たちは、これらの緻密な計画を頓挫させつつある。アメリカの目論見は破産しつつある。

### ネオコンの連中は今、大パニックに陥っている

ブリンケンのナンバー2、ロシアフォビアの好戦主義者ビクトリア・ヌーランドが、アメリカ上院で認めた。「春まで(現実的には2024年まで)戦場にエイブラムス戦車は到着しないだろう」

彼女はまた、モスクワが「交渉に戻る」なら「制裁を緩和する」と約束した。その交渉は、2022年の春にイスタンブールでアメリカ人自身が打ち切ったものだ。

さらにヌーランドは、ロシアに「軍隊を撤退させる」よう呼びかけた。ブリンケンの「見逃せないオファー」からにじみ出るパニック感に比べれば、それは少なくともユーモアのある対応と言えるだろう。しかしロシアはこれに対し、「無反応」という反応をおこなった。